第4章

授業にCLILを取り入れてみよう

発展編として、CLIL（内容言語統合型学習）を取り入れた外国語の授業づくりについて解説します。CLILで大切にしている考え方を、授業実践例から見てみましょう。

第４章

授業にCLILを取り入れてみよう

4-1 CLILとは何か

CLILは、英語の4技能をバランスよく身につけるための教育方法として、近年注目されています。
まずはCLILの基本をおさえておきましょう。

内容豊かな英語授業のあり方

―CLILアプローチのすすめ―

（監修） 上智大学教授 **和泉 伸一 先生**

CLILとはContent and Language Integrated Learningの頭文字を取った略称で、日本語では「内容言語統合型学習」と訳されています。多言語主義を掲げるヨーロッパ発祥の考え方で、現在急速に世界中で広がりつつある外国語教授法です。CLILはなぜそんなに脚光を浴びているのでしょうか。その大きな理由の一つは、**言葉の学習を他教科や社会問題などの話題と結びつけて内容を豊かにし、主体的な学びを促そうとしていること**があります。

内容と言葉を重視することで「言葉の原点」に戻る

従来の教え方では、言語学習と内容学習を切り分けて行うことが多く、外国語授業では単語を覚えたり、文法を理解したりすることに専念してきました。そこでは伝えられる内容は二の次とされ、文法演習だけでなくリーディングの授業でさえも、そこで伝えられる意味内容や文脈などについて話を深めたりすることはあまりなされていなかったかもしれません。その結果、学習が無味乾燥で機械的になりやすく、学習意欲の減退や記憶定着の弱さ、そしてコミュニケーション能力の発達の欠如など、様々な問題が指摘されてきました。こういった問題を解決するために、**CLILでは言葉の学びは伝えるに足る意味内容があってこそ価値があるのであり、内容と言葉を同等に重視して授業で扱うことで一石二鳥の学びを目指そうとしたのです。いわば、「言葉の原点」に**戻ることで、学びの質を高めようと考えたのです。

「使いつつ学び、学んでは使う」という考え方

CLILが大切にするもう一つの考え方として、「**使いつつ学び、学んでは使う**」(“Learn as you use, use as you learn.”)というのがあります。言葉は使うものであり、単に文法規則や単語を理解・暗記しているだけでは意味がありません。これまでの外国語授業では、まずはしっかりと言葉を学んでから(learning)、後でそれを使って練習する(using)といった順序がきっちりと決まっていました。一見効率的なやり方ですが、本来、言葉の学びにはそのような順序性はありません。むしろ、**使おうとするから学びたくなり、少しでも学ぶと使いたくなるというのが自然な言葉の学びの姿です。**そこでCLILでは「使う」ことを「別の場所で、いつの日か」(somewhere else, sometime later)ではなく、「**今、ここで**」(here and now)を基本として考え、そこに「学び」の要素を織り交ぜていくことを推奨しています。

ここで気をつけておきたいのは、「使う」とは、必ずしも「話す」ことだけを意味しないということです。内実ある言葉に触れて理解し考えることは、広い意味で言葉を「使う」ことであり、四技能五領域(聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くこと)はその意味で全て言語使用にあたります。言語習得の基本はまず「聞く」ことにあるため、**どのような内容のことを、どのような文脈で児童・生徒に聞かせるのかということは、まず何よりも大事になります。そこから徐々に話す表現を蓄積していき、話したい意欲を高め、自発的な発話へと結びついていくのです。**中学生や高校生ともなると、読むことも多く入ってきて、読みを通して内容と言葉の知識の両方を得て、それを伝えたり話し合ったりする中で、さらなる学びへの刺激を得ていけるのです。このようなCLILの考え方は、文部科学省が示す小学校、中学校、高等学校の新学習指導要領でうたわれるコミュニケーション重視の姿勢や、教科間の連携の必要性、また知識・技能の統合などの考え方と大きく重なっていることは明らかでしょう。

Column

新学習指導要領から見るCLIL

新学習指導要領では、他教科等の学習の成果を、外国語学習の中で適切に生かすこと、他教科等で扱われる自然環境、世界情勢、科学技術、平和などの話題など聞いたり読んだりしたことを基に、その内容に関する自分の意見や感想などを発信する力を身に付けさせることが求められています。また、英語を用いて課題解決を図る力を育成することを工夫する必要があります。これらに対応できる授業作りを意識することが非常に大切です。

4-2 4Cについて

CLILの考え方を理解する上で、4Cと呼ばれる原理を把握しておくことは重要です。四つのCとは、Communication(言語)、Content(内容)、Cognition(思考)、Community(協学)を表しています。以下に四つのそれぞれのCについて詳しく説明します。

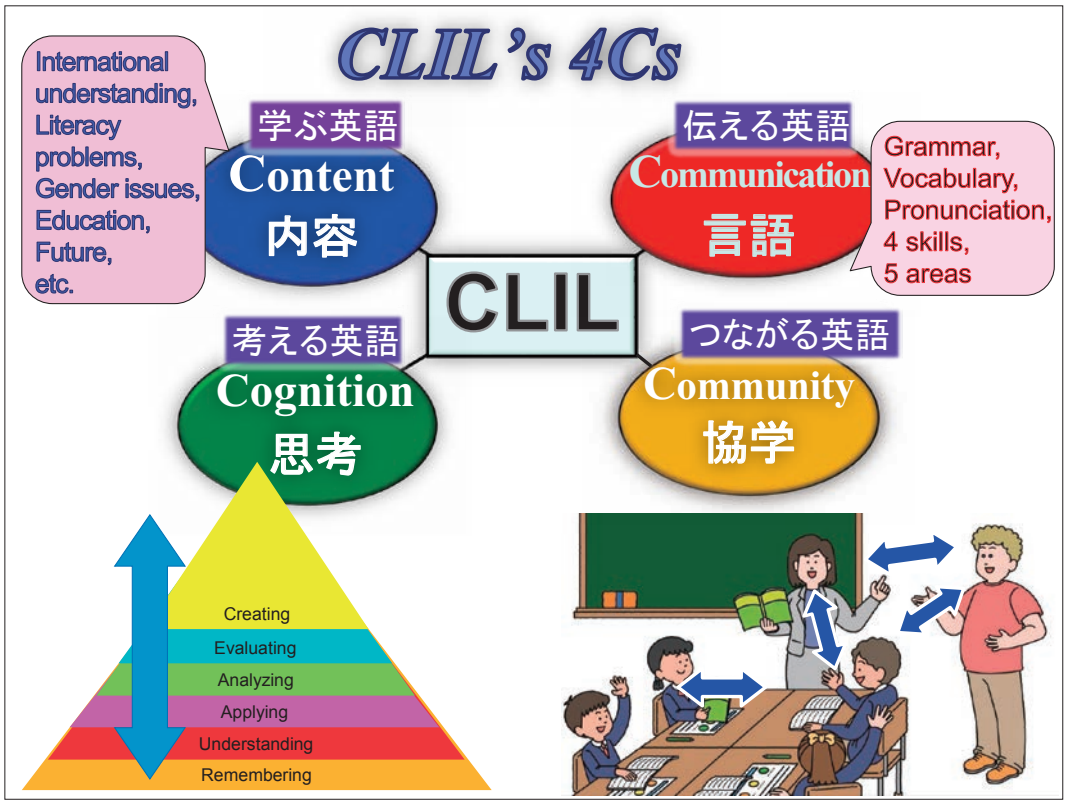


図1. CLILの四つのC(和泉先生のスライドより)

❶Communication(言語)……言語知識や言語スキル

Communicationは、言語知識(文法、発音、語彙)や言葉の四技能五領域を含みますが、言葉の知識や技能を意思伝達の目的のために使っていくことで、学習効果を高めます。コミュニケーションの過程のどのタイミングで、どういった方法で教員が学習者の言語理解を促していけるかが、CLILの一つの大きな醍醐味でもあります。そこで起こる教員の補助や働きかけは、総称して"scaffolding"(足場がけ)と呼ばれていますが、**教員主導の教え込みではなく、あくまでも学習者主体の学びを支援するところ**に主眼があります。学習者が高いところに手が届くように、教員が全身を使って学習者の足場をこしらえて支えるイメージです。

❷Content(内容)……授業で扱われる内容やトピック

2つ目のCのContentは、授業で扱われる内容やトピックのことを指します。英語の教科書には、小学校なら、動物、曜日、天気、食べ物などの話題があり、中学校や高等学校なら海外や日本文化、戦争と平和、防災、偉人や歴史についてなど、様々なトピックが配列されています。CLILではこういった題材を**できるだけ児童・生徒の生活と密接に結びつけて提示して、内容理解を深めていこう**とします。児童・生徒の「知りたい」「分かりたい」「伝えたい」という気持ちを高めていくことを重視します。

とは言っても英語の授業であるので、必ずしも新たな専門知識を教える必要はありません。例えば小学校で動物のトピックを扱う際には、単に動物の名前を英語で覚えるというだけではなく、日本と海外のペット事情を比べてみたり、地球温暖化による動物の住みかの現象について考えたり、世界の絶滅危惧種の問題などに話を広げていくこともできます。中学校や高等学校では、インドの独立の父ガンジーについての読み物があれば、なぜ非暴力不服従の運動でなければならなかったのか、その考え方が現代の世界でどう活かされうるのかなど、内容に深く踏み込んでいくことが可能です。**児童・生徒の年齢に相応な内容を考え、彼らの知的好奇心をくすぐることが重要です。**

❸ Cognition（思考）……学びを深める思考力

Cognitionは思考のことを指しますが、内容に踏み込めば踏み込むほど、相応の思考力が必要になってきます。これまでの日本の英語授業で多用されてきたのは、理解したり、覚えたりする思考力でした。もちろんこれらも大事な思考力ではあるのですが、人の学びは**何かの問題について判断したり、原因や解決策について考えたり、応用・創造したりするところ**にその「ワクワク感」があります。これらの思考力の活用について、順序を固定するのではなく、両者を行ったり来たりする中で学びの相乗効果を発揮していけるのです。

❹ Community（協学）……さまざまなコミュニティとのつながり

そして最後のCがCommunityです。Cultureと呼ばれることもありますが、日本の英語教育環境に当てはめた場合、Communityの方がしっくりくるかと思われます。ここでいうCommunityとは日本、アジア、世界と広く捉えることもできますし、都道府県、市町村といったコミュニティも考えられます。とりわけ児童・生徒にとって日常の基本となるコミュニティは、やはり、学校、学年、クラスとなるでしょう。**英語授業を通じてクラス内での人と人とのつながりを大切にする**ところから始まり、より大きなコミュニティへと思いを馳せるようになることが大切でしょう。教員と児童・生徒との間の豊かなやり取りを起点として、ペアワークやグループワークなどを通じて、児童・生徒同士で思いや考えを伝え合う機会をできるだけ多く提供していきたいものです。外国人指導助手（ALT）がいる場合は、日本人教員と外国人教員の間でのやり取りも積極的に行い、そこに児童・生徒を巻き込んでいくことが大切です。

以上のように、これら四つのCはそれぞれ独立しているわけではなく、全てが相互に補い合いながらダイナミックなCLIL授業を生み出していくのです。コミュニケーションには当然相応の内容が必要であり、内容について理解し話し合っていく中で思考が刺激され、学びの共同体としてのクラスがつながっていくことで皆の学びが広がり深まっていくのです。四つのCはどれも欠かすことができず、**授業準備、授業運営、そして授業後の振り返りのそれぞれの段階でこれら四つのCのつながりを意識して考えていくこと**が重要になるでしょう。

Memo 映像から得た気付きやポイントをメモしましょう

4-3 CLILの実践例

ビデオ教材ではCLILの要素を取り入れた授業の例を紹介します。授業の中でCLILの要素がどの場面でどのように含まれているか示しつつ、授業を行う場合にどういった点に気を付けるべきかという、二つの観点から解説を加えていきたいと思います。この授業は、**“Environmental Sustainability”「持続可能な世界」**、とりわけ**“Problems of Deforestation”「森林伐採」の問題を扱った60分の授業**となっています。ここではその一部を取り上げます。学習者の英語の習熟度は揃っていませんが、おおよそCEFRでいうA1レベルの学習者が対象となっています。

まず、いくつか大事な視点を示しておきたいと思います。始めに、この授業では「CLILの4つのC」である「Communication—Content—Cognition—Community」を考えた双方向スタイルの授業アプローチを採用しています。また、全体の構成内容は、**導入**、**展開**、**ジグソータスク（グループ活動）**、**全体討論**、そして**まとめ**の5部構成となっています。語彙や文法などの形式学習から始めるのではなく、最初から意味内容に焦点を当てて、必要に応じて言葉の指導を至るところに織り交ぜていく手法を取っています。**従来型の英語授業の多くは、語彙や文法などの形式学習から始めることが多くありましたが、CLIL授業では意味内容を考えることから授業が始まります。**そして、必要に応じて言葉の指導を織り交ぜていくことで、文脈の中で言葉を学ぶことを促していきます。

＜授業の流れ＞

① 導入	導入段階では、教師が児童・生徒にとって身近な例を示して、画像や実物などを用いつつ内容を英語で紹介しています。
② 展開	話題を展開する場面に移行していきます。木から作られる製品の原材料はどこからやってくるのか、生徒に引き続き問いかける形で話が進んでいきます。
③ ジグソータスク（グループ活動）	学習者同士が異なる情報を集めて、情報を互いに交換し合うジグソータスクにより、助け合いながら視点の違った意見を集めます。
④ 全体討論	全体討論は情報共有と解決策の討論の2部に分かれています。ジグソータスクで持ち寄った情報を共有しつつ、クラス全体で問題の解決策を探ります。
⑤ まとめ	授業のまとめでは、教員が社会問題の解決は容易ではないが、皆で一緒に考え続けていくことが大切とのメッセージを送っています。

以下では、授業の流れに沿って、CLILの要素を取り入れた指導に関するポイントを絞って紹介します。

① 導入

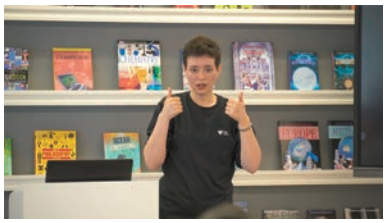
- 森林伐採の問題という難しい社会的な題材について、視覚教材を巧みに利用して、分かりやすい英語で生徒に語りかけながら話に入っていく様子が見られます。
- 難易度の高い社会問題に関して英語で語ろうとする際は、**「目で見てわかる」、「耳で聞いてわかる」の両方から迫っていくこと**が特に重要です。

・身近な例の導入から授業を始めていることも大事なポイントです。このような始め方をすることで、**社会問題と日常生活が密接に結びついていること**を示し、また、**児童・生徒がもっている知識を活性化させること**で英語理解を助け、これから展開される内容学習への動機付けとすることができます。
・紙の使用量について話す際は、ただ大きな数を出すだけでなく、実際にB5のノートを見せつつ、1日にノートブック5冊分の紙を消費していることを示すことで実感を与え、問題意識を持たせています。数字だけを示すよりもイメージしやすく、より良い内容理解につながる点でも効果的です。
・16,000トンという大きな数字も出てきますが、この機会を利用して、英語の大きな数の読み方を指導しています。**必要な箇所で言語的な説明や理解の補助をすること**が、CLILの要素を取り入れた授業では大切です。
・また、16,000トンを「4,000頭の象」に置き換えることで、紙消費量の多さを映像で巧みに伝えています。

② 展開

・展開の場面の始めに、“From which country does Japan import paper the most?”（日本はどこの国から最も多く紙を輸入しているの？）と生徒に問いかけています。importは鍵となる単語であり、ほとんどの生徒にとっては未習語です。“import”の意味を、ジェスチャーを使って生徒から“bring”という単語を巧みに引き出し、生徒が既に知っている単語と新出単語を上手に結び付けて教えています。
・また、“From which country～?”といった形で「**開かれた質問**」**形態**（**Open Question**）で問いかけていますが、少し待って生徒の反応を見てから、「**選択式の質問**」**形態**（Semi-Open Question）（“I'll give you four choices. Which country does Japan get most of its paper products from, America, Brazil, Thailand, or Indonesia?”）に変えて問いかけ直しています。生徒の理解能力と発話能力の両方を気にかけつつ、柔軟に対応することが大切です。
・別の場面では、生徒の“Animal trouble …”という発言を受けて、“Yes, animals will have problems.”と言い直し、さらに“What kind of problems?”と話をつなげています。これは第二言語習得研究で見られる**“recast（言い直し）”**の手法や、**“expansion（拡張）”**のテクニックです。このようなやり方を通して、コミュニケーションをつなげつつ、言葉の補助を入れています。言い直しに対して即座に反応する生徒もいれば、なかなか気付かない生徒もいるでしょう。生徒の気付きは習熟度などによって変わってくるので、無理矢理生徒に気付かせるように仕向けるよりも、心の準備ができたらいつでも気付けるように、**普段からさりげない言い直しを数多くすることが大切です。**

③ ジグソータスク



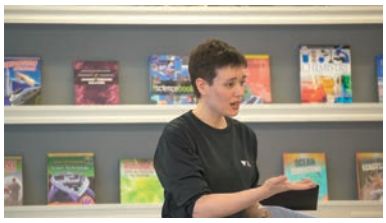
- **「ジグソータスク」とは、ジグゾーパズルのように、学習者同士が異なる情報を集めて、その情報を互いに交換し合うことで、課題を完成させていくもの**です。学習者の学びへの主体性を引き出すと同時に、生徒同士のコミュニケーションを促すことにつながります。
- ここでは、8人の生徒を視点の異なる四つの役割に分けています。二人組になった生徒が教室の隅に行って英文を読んできて、あとで皆に伝えます。席に着いたままでも可能ですが、立って役割ごとに別々の場所に移動して異なる情報を探しに行くことで、皆に伝える必要性と責任感をより強く感じさせることにつながります。
- 今回扱う四つの役割は、animals, producers, sellers, consumersですが、“environmentalist”（環境団体代表）などの役割を追加してもいいでしょう。**異なる意見の間で対立や衝突が生まれるような役割をタスクに入れ込むことで、思考の刺激につながり、解決策を考える必要性をより強く実感させることができる**でしょう。
- この授業では、まずは教員が四つの役割を説明して、活動の流れをスライドを使って説明しています。活動の流れが複雑な時は、それを順番にして視覚的に分かるように説明すると効果的です。
- 生徒がグループに分かれて英文を読んで理解しようとしている際には、教員はサポーターとしての役割を果たすことになります。できるだけ生徒の主体性を尊重して、支援の必要のない時には見守る姿勢も重要でしょう。
- また、教員が生徒から援助を求められた際（映像例では、“shrinking”の意味を問われた場面）、**生徒にまず文脈から推測することを促して、生徒から答えを引き出せるように**、支援をしています。生徒の姿からも自主的な学びが刺激されていることがうかがわれます。

④ 全体討論

- 全体討論では、前半で各ペアが持ち寄った情報を共有することで問題点を明確にしています。それを受けて、後半でその問題の解決策を話し合っています。
- また、生徒はメモをしたキーワードを参考に、読み取ったことをクラスに報告しています。この時点で各ペアからの報告があることは、ジグソータスクを始める前の説明で伝えられており、そのため生徒は責任感を持って読み取り活動を行い、報告に臨んでいます。このような活動は個人で行うことも可能ですが、**ペアやグループで行うことで、互いが助け合うことにつながります。**全体報告の前にペアで報告内容を再確認したり、報告の練習を行ったりする時間を設けてもよいでしょう。
- **生徒の発表後には、教員がそれぞれの立場の要点を整理していること**も重要です。その類似点や相違点を明らかにして、問題の理解を促します。ここで教員が示す言い直しは、発表する生徒の発話を助けたり、他の生徒の理解を促したりする上で効果的です。新出単語など多くの生徒に難しいと思われる単語があれば、補足説明を加えたり、板書したりすることも考えられます。

・また、“Animals are dying. Is this okay? Similar problems are happening in other parts of the world. Is this okay?”と話した問題の一般化を図り、生徒の問題意識を喚起し、解決策を考えることを促しています。
・生徒がすぐにアイディアを思いつかない場合は、個人で考えたり、ペアや小グループでまず話し合ったりする時間を設けるとよいでしょう。児童・生徒から出たアイディアは箇条書きで板書すると、クラス全体でのアイディアの共有を容易にして、多角的な視点から物事について考える力を養うために役立つでしょう。

⑤ まとめ



・最後に、決められた解決策を提示するのではなく、これまでの議論をまとめつつ、今後も探究し続けていかなければならないと訴えかけて終わります。
・教員の言葉の中では、世界の問題について考えていくことの必要性と同時に、英語を学んでいく必要性も強調されており、内容学習と英語学習が不可分の関係にあるというメッセージが感じられます。英語学習はそれ自体が独立して存在しているのではなく、**英語を使って世界についての理解を深め、考え、発信し、行動していくことが大切である**というメッセージは、CLILの目指すCommunication-Content-Cognition-Communityとの密接なつながりを反映しているものです。
・さらに多くの図表、写真等を使って森林伐採の現状と問題についての情報を共有して、より深く考えさせることもできるでしょう。このような情報は教員が用意して共有することもできますが、事前に生徒が調べ学習として調査し、発表すれば生徒の学び合いにつながります。図表などの情報を活用する利点として、**(1)問題についての理解を端的につかんで深めることができる**、**(2)英語での内容理解が容易になる**、**(3)生徒自身が英語で発話する際に図表を指し示しながら行えるので、発話が容易になる**ということがあり、内容学習と言語学習の双方で有益な試みとなるでしょう。

今回示した授業はあくまでもCLILの要素を具体化しようとした一つの例です。CLILには特定の決まった「型」があるわけではないため、4章1と2で解説したようなCLILの原則をもとにして、様々なCLILの形態があるということを強調しておきたいと思います。ここで示した授業を絶対と捉えるのではなく、CLIL授業ではどういった点に注意して、どのように授業を運んでいったらよいのか、この授業実践例を参考にして学んでいただければ幸いです。CLILの多様性についての理解をもう一歩深めるために、最後にCLILの種類について触れておきましょう。

4-4 CLILの種類

「内容も言葉も両方とも大切にした英語の授業など、うちの学校では難しくてできない」「自分の教える児童・生徒は英語を学ぶだけで精一杯で、とても内容に踏み込んで考えるなど無理だ」「CLILは授業準備に時間が必要で、とてもそんな余裕などない」などのように考えられる先生方もいらっしゃるかもしれません。そこで最後に、CLIL的な要素を加えるためのハードルを下げる意味でもCLILの種類について言及しておきましょう。

CLILは広範な教育方法を包含しており、その実現方法は行われる学校や対象とする児童・生徒によって柔軟に使い分けることが可能です。CLIL授業を考える上で、少なくとも四つの点で柔軟性を持たせることができます。

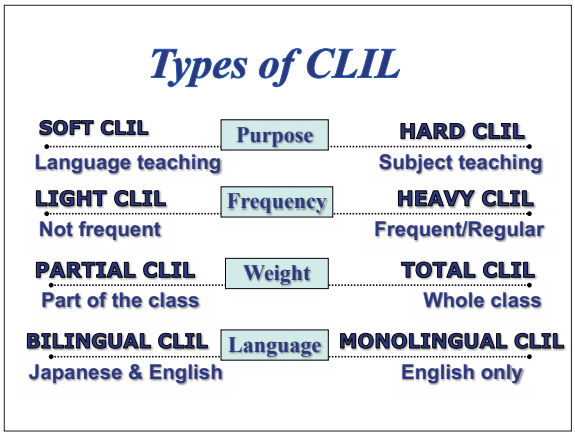


図2. CLILの種類

（池田真（2011）「CLILの基本原理」渡部良典、池田真、和泉伸一（編）『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たなる挑戦―第1巻　原理と方法』（pp. 1-13）上智大学出版参照）

授業目的（Hard CLILとSoft CLIL）

CLILは内容と言語教育を統合する教育アプローチですが、両者のバランスは授業目的によって変わってきます。例えば、児童・生徒の英語力が比較的高く、教員も専門的な内容を英語で教えられる授業力を身に付けている場合は、**内容を重視したHard CLIL**とすることができるでしょう。一方、英語の授業の中で言葉の知識や技能を教えるかたわら、内容にも相応の注意を払って教えようとする場合は、**言語寄りのSoft CLIL**となるでしょう。当然、CLILであるためには、どちらの場合も内容と言葉の双方に注意を向けた授業準備と授業運営が必要になってきますが、それぞれの授業目的に応じて重点の置き方が変わってくるでしょう。

頻度（Heavy CLILとLight CLIL）

CLILの別の柔軟性は、その頻度にも現れてきます。もし**毎回の授業で内容と言語の統合を目指した授業を行おうとするならば、Heavy CLIL**となるでしょう。一方、少なくとも最初のうちは準備時間も限られるので、**時々CLILの授業を行おうと試みるなら、Light CLIL**となるでしょう。まずは学期に1～2回程度で始めてみて、児童・生徒の様子と反応を見つつ、徐々に回数を増やしていくこともできます。

ウェイトのかけ方（Total CLILとPartial CLIL）

同様に、1時間の授業中にどれだけCLIL的な要素を交えるかということ（ウェイトのかけ方）にも、選択肢があります。**45分、50分授業の全てを内容言語統合型で行えば、Total CLIL**となり、**授業時間の仮に半分だけ行うとすれば、Partial CLIL**となるでしょう。前半は従来通りの授業、後半は内容に踏み込んだ授業というやり方もあり得ます。

使用言語（Monolingual CLILとBilingual CLIL）

最後に、使用言語に関しても、CLILは柔軟に対応できます。英語科の授業で行うなら、英語使用量が多いことに越したことはありませんが、状況に応じて日本語が使われる場面があっても構いません。もし**英語のみで授業を行うならば、Monolingual CLIL**となり、**日本語も適宜交えるならBilingual CLIL**となるでしょう。ただ、気を付けたいのは、母語である日本語の方が手っ取り早い、あるいは簡単だといった理由だけで日本語に走ってしまうと、せっかく意味のある内容を英語で理解する、発話するという貴重な学習機会を失ってしまいます。そのため考え方としては、英語使用を最大限にしようと努力しつつも、どの場面でどの程度日本語を交えると教育的効果が高いかということを一つの判断材料として言語バランスをとっていくといいでしょう。

このように、CLILは**その目的や状況によって柔軟に変えていくことが可能**です。要は、自分の中でハードルを上げ過ぎないことが大事で、CLILをあまり難しいものと考えてしまうと、大事な初めの一歩が踏み出せなくなってしまいます。CLILを少しでも試してみると、そこにいつもとは違った児童・生徒の様子や反応が見られたり、先生方自身も自分の違った側面や、授業の楽しさに新たに気づくことがあるかもしれません。いろいろと試しながら、先生方と児童・生徒ともに、お互いの秘めた能力を開拓して、開花させていく機会となればと願っています。

［和泉 伸一］